

シュメール、古代人からの手紙

旅人よ、旅人よ、母に伝えて下さい。
ウクビが語ることを、話して下さい。
ウルはナンナ神の都市の栄え、エンキ神の都市の豊かさです。
エリドゥで私は楽師長の家で、「イギツムラ」だけで養われています。
新鮮なパンとビール。それが私に必要です。
お願いですから、特使に持たせてやって下さい。至急です。



いきなり、加山雄三の歌のような文句で始まりましたが、これは「猿の手紙」と呼ばれる古代の楔形文字で残された手紙です。加山雄三も古くなったが、これはもっと古い。実に古い。遥かに古い。実は古代メソポタミアの遺跡から発掘された4千年前のシュメール人の粘土板文書です。

発見されたのは、「ウル」という都市国家の遺跡で、それより2千年も前に、メソポタミアで世界最初の文明を築いたシュメール人は、チグリス河とユーフラテス河に挟まれた豊かな大地で、小麦を栽培し、パンを作り、ビールを作り、日干し煉瓦で窓や屋上にテラスガーデンのある家を作り、町を作り、いろいろな職業を生み、商業を生み、都市を生んだ。

彼らの文化は、美術、建築、宗教はもちろん、天文学、高度な暦や数学、医学、法律に及び、驚くべきことに彼らが残した「ギルガメシュ叙事詩」や「エンメリカルとアラッタの君主」といった文学作品には、旧約聖書の「ノアの洪水」や「バベルの塔」伝説の原型が語られていたのです。

今回は、遙かな古代オリエントへのタイムスリップですが、これには深い理由があります。僕は最近、NHKのカルチャーラジオの「歴史再発見」を聞いているんです。ポポア・ポコの会員になったので、俄かに向学心に燃えた？、という訳ではなくて、実はオフロの中で聞くんです。オフロラジオ。シャワーの時は聞こえないけど別に構わない。ラジオで歴史の先生が「クレオパトラは大理石のお風呂に寝そべて、大勢の召使いに身体を洗わしていた」なんて、知られざる歴史の真実を語ってくれる。我が家も来年あたり大理石にしたいけど、身体を洗ってくれる召使は無理だよなあとか、考えていると、自然とゆっくり湯に漬かるようになる。これがいい。ガン予防にもなるし、年寄りには、絶対健康にいいと思うんです。

それで、この間の放送が「楔形文字が結ぶ古代オリエント都市の旅」と題した、古代オリエントの話だったんですが、これが、まあ面白かったので、僕も粘土板文書を、いやパソコン文書を残してみようと思った次第です。

さて「猿の手紙」です。これはウルの学校跡から発掘された粘土板文書です。

ウクビというのは猿のことで、直訳するとエリドゥの楽師長に飼われている猿が、エサが悪いから何とかしてくれと、母猿に訴えている手紙ですが、まあ、いくら大昔といっても猿は手紙を書かないので、これは、ウルの学校の生徒が、自分を比喩的に猿に例えて、寄宿舎のメシが不味いから何とかしてくれと母親に訴えている、というのが正解です。ウルの学校は全寮制なんです。

で、言いたいのは、ウルにはメソポタミアに本来いないはずの猿がいたということなんです。それもペットとして飼われていた。楽師長というのは音楽をする人だから、何か芸をする猿かも知れないけど、ウルはそれほど豊かだった。「イギツムラ」というのがどういう食べ物か分からないんですが、もしかしたら、これはウクビ君のジョークで、学校の先生の名前かも知れないなあとか、想像するんですが、どうでしょう。

ウルのパンは、インドのナンのように、パン窯に貼り付けて焼く硬いパンで、粉の種類や中に入れる具で種類があって、ドゥルドゥルンナ・パンとか、バルシ・パンとかいう名前が残っています。それからビール、これはまあ、どっちかという、松島菜々子の「一番絞り」ですかね。

ところで、このウクビ君の訴えは母親に届いたんでしょうか。ウクビ君の母親は、新鮮なパンとビールを彼に送ってくれたんでしょうか。それは分からないけど、彼の手紙は現代の僕たちに届いたことは確かです。僕たちは新鮮なパンとビールを有り余るほど持っているけど、もう彼に送ってやることは出来ない。僕たちは彼の母親じゃないし、何より、4千年もの長い時間が経ってしまったのだから。

妹よ、私はそなたと「キリ」へ行きたい。

美しい妹よ、私はそなたと「キリ」へ行きたい。

私はそなたと水路のそばの「イグダグの木」へ行きたい。

妹よ、私はそなたと「リンゴの木」へ行きたい。



ウルは、シュルギ王の時代に繁栄の絶頂を迎えます。

「四方世界の王」と称したシュルギ王の治世は48年も続くこととなります。学校に通い、文字の読み書きが出来たシュルギ王は、また「シュルギ王賛歌」と呼ばれる優れた文学作品の粘土板文書を残しているんです。前述の詩は、その中の「シュルギ王の恋歌」と呼ばれるもので、妹は恋人のことです。万葉の歌と似ていますね。キリ

は楽園とか庭園かいう意味で、シュメールの都市には果樹の豊かに茂るキリがあって、そこは恋人たちが寄り添う場所だったようです。それにしても素朴というか、分かりやすいというか、こんな風に言われたら、「あなたって、たぶんいい人なんじゃないかな」と言って思わず涙ぐんだりしないですよ。

ところで、シュルギというのは「高貴な青年」という意味ですが、残念ながらシュルギ王の頭部の彫像は発見されていないのでどんな顔立ちだったのかわ

からない。でも同じシュメールの王の彫像から類推は出来ます。少し前のラガシュという都市国家のエンシであったグデア王の彫像です。グデア王の彫像は30個ほどもゾロゾロ出てきて、そのうちの 하나가、奈良の天理参考館にあるんです。カット写真のものがそれですが、参考館の淡い光の中に置かれたこの彫像は驚くほど知的な風貌で、憂愁ともいえる精神性を感じさせます。グデア王、この平和を愛したといわれるシュメールの王は、私たちに古代の人々がいかに豊かに人間性を持って生きていたかを、伝えようとしているようです。

私が歌った歌で、坊やが大きく育ちますように
坊やが、木の枝のように強くなりますように
坊やが、シャキルの木のように広く枝を広げますように
坊やの妻が、坊やの暖かい抱擁に横たわりますように
坊やの妻と子供が、坊やとともに幸福でありますように……………

さて、シュルギ王、彼は10台の後半に結婚します。王妃は、「マリ」の王女「タラーム・タリム」。ウルから700キロも離れたユーフラテス河の上流の国で、まあ、政略結婚です。でも花嫁は華やかに飾りつけられた葦舟で、ユラリユラリ、長い旅をして、胸躍らせ、嫁いできたんでしょ。近年、彼女の花嫁姿を類推させる資料が、ウル王墓から見つかっています。

シュメールには「殉死」の風習があって、王の墓の横から殉死させられた王妃のものと思われる儀式用の衣服や、頭飾りや、見事な金銀の装身具が発掘されたんです。カットの写真はそれらを使って復元された王妃の姿で、いわば、これは、死の旅立ちの正装でしょう。でも、僕は思うんです。たぶん彼女は若い日に生きていた王に嫁いだ時も、この華やかな姿で、遥かな河の流れを下ってきたんだと。そして、長い年月を経て、王の死が訪れたとき、若い日と同じ姿で、葦の舟に乗って星空の河を、遠く遠く流されて行ったんです。

王妃タラーム・タリムはシュルギの子を産みます。後のアマル・シン王。もちろんシュルギ王には、王妃以外にも沢山の后がいて、そのうちの一人が作った子守唄が残っていました。それが上の歌で、まあ、これもストレートで分かりやすい。まだ子供は赤ちゃんなのに、嫁や孫の幸福まで願っているところなんか素晴らしいですね。でも、残念ながら、シュルギ王の坊やも孫も幸せな人生は送れなかった、そしてシュルギ王の死後、50年も経たないうちに、後にバビロニアを打ち立てるアモリ人に攻められ、繁栄を誇ったウルは滅亡し、シュメール人の姿は歴史の舞台から消え去ることになります。英邁な父親の後継者が必ずしも名君になれないのは、いつの時代も繰り返される、厳しい歴史の真実なのです。

粘土板の解読で、少しずつ見えてきた謎の民シュメール人の社会。それは、その後の人類が経験する、政治、都市、教育、家庭、病気、戦争といった問題を全て経験していました。シュメール人こそは人生の意味を考え、喜びを考え、悲しみを考えた最初の人々だったのではないのでしょうか。

10月11日 播磨の国風土記を歩く 日岡神社から石の宝殿へ

先日はご苦労さまでした。台風一過、秋晴れに恵まれていい日でしたね。

ところで、帰り道の生石神社から宝殿駅に向かう時に見た、道路脇の電柱の紫と白のきれのついたハタキのようなもの、あれは「紙垂棒(しだれぼう)」といって、生石神社の秋祭りのための飾りつけで、別に高砂市のシンボルの翁が持っているホウキとは関係ないそうです。

それから、麻殖生さんが話しておられた、阿蘇から舟で石を運ぶ話、あれは4年前の夏に行われた「古代の大王墓の石棺の搬送実験」で、高槻の今城塚古墳を想定した約7トンの阿蘇のピンク石の石棺を載せたイカダを、古代の船形埴輪から復元した木造古代船(長さ12メートル、漕ぎ手18人)で引っ張って、熊本の宇土市から大阪まで航海したそうです。所要日数は34日間、旅程860キロ、船の名前は「海王」。

それから、もう一つ、なんでした?、ああ、石の宝殿、何故あんな巨大な石造物があんな所にあるかということですか、それは、あなた、池田さんや麻殖生さんに分からないものが、僕に答えられる訳ないじゃないですか。



「あ、二上山が見えますよ」

賑やかな声に驚いて、僕も東の空を探してみました。でも、僕の視力では、ここから二上山は見えなかったですね。場所は、印南別嬢(いなみのわきいらつめ)の陵のある、日岡公園の展望台です。

でも、印南別嬢にはここから見えたはずですよ。僕の会社は大和川の河口にあるんですが、そこから大和川上流にきれいに峰を分けた二上山が見える。ということは、ここから明石海峡と大阪湾を隔てて、その向こうにきっと二上山は見えるはずですよ。でも彼女が本当に見たかったのは、二上山の山の向こう、彼女の夫の宮殿のある大和の国と、そこで立派に成人した我が子、ヤマトタケルの姿だったのかも知れない。

ヤマトタケルのお母さんが播磨にいたというのは知りませんでした。

父親との関係に悩み、「父さんはどうして僕を遠ざけ、戦いに行かせようとするんだろう」と、叔母の倭姫に心の悩みを訴えたヤマトタケル。父親の愛を疑い、父親の愛を求めて、古代の日本をさまよったヤマトタケル。そんな我が子を、彼女はどう見ていたんでしょうか。

傷つき、空をさまよう魂となって大和の国に帰って来たヤマトタケル。白鳥に身を変え、二上山を越え、羽曳野の丘を越え、鳳の浜まで辿り着くヤマトタケル。もしかしたら、彼は最後の力を絞って遥かに海を越え、ここ、播磨の国を目指していたのかもしれない。大きく羽根を広げる明石大橋を眺めながら、僕はそんなことを考えていました。